

シラカバの恵み

旭川発 官民の挑戦

④

食に美容に「万能材」商品次々

旭川市内で19、23日に開かれた家具とデザイン祭典「旭川デザインウィーク」(ADW)で、主会場の旭川デザインセンターに設けられた斬新なブースが来場者の注目を集めた。白と赤みを帯びたフロリング。切り株を中心に据えて周囲にカウンタや棚が配置され、優しい風合いの家具、食器、籠などが並ぶ。

■ 豊かな資源

いづれも広葉樹シラカバで作られた品々。地元有志でつくる「白樺プロジェクト」が活動の第一弾として出品した。来場した同市内のコピーライター西川佳乃さん(57)は飲料用樹液を購入。「家具だけでなく、さまざまなものに使えるという視点がユニーク」と興味深そうに見て回った。

道民になじみ深く、豊富にあるシラカバをもっと利用できないか。プロジェクトはそんな志を共有する地元家具メーカーや木材研究者らが昨年秋に集まり、会合を重ねてきた。



旭川デザインウィークで設けられた白樺プロジェクトのブース。家具や食器を並べ、シラカバの可能性をPRした(打田達也撮影)

は神様からの贈りもの」とほれ込む。ADWの展示に向け、樹皮を削り取る特注機械を120万円で購入。円筒形の木にシラカバの樹皮を巻いたスツールが「切り株みたいでおしゃれ」と評判になった。

鳥羽山代表は「身近な資源を上手に利用し、自然と調和する。そういう文化を根付かせる第一歩になった」と力を込める。

◇ 白樺プロジェクトの活動

道内で伐採されるシラカバの約9割は製紙用チップ材として使われ、家具材や建材としての評価は低い。直径が30、40センチで板材として限界があり、強度が足りないなどとされているためだ。チップ材としての市場価格は1立方メートルあたり9600円と、同じ広葉樹のナラの丸太と比べて4割程度だ。

ただ、シラカバは火山噴火後の荒地でも、最初に根を張るほど強い生命力を持つ。樹齢は約60年で、百数十年とされる他の広葉樹と比べて成長が早く、再生サイクルが早い。プロジェクトはこうしたシラカバの可能性に着目。新興国の台頭や資源不足で広葉樹の外材の確保が難しくなる中、持続可能な社会を支える切り札になり得る。板を接ぎ合

われれば用途は広がる。

■ 可能性探る

美深では毎年4月、白樺樹液春まつりが開かれ、独特の甘みがある樹液がお茶やコーヒーとして振る舞われる。ロシアでは樹皮を使

った小物入れが伝統工芸品になっている。このほか化粧品や茶葉、糊(ちりめん)にも使われ、「万能材」として大きな可能性を秘める。

プロジェクトのメンバーで家具メーカー「木と暮らしの工房」(東川)の鳥羽山聡代表(50)は「シラカバ

が本格的に始動した。材木として重要視されてこなかったシラカバを、旭川や近郊の官民有志が知恵を絞り、豊かな資源として活用していく挑戦を取材した。(五十嵐俊介が担当し、2回連載します)